

RUBeC 演習を終えて

白木 稜也

Ryoya SHIRAKI

情報メディア学専攻修士課程 1年

1. はじめに

私は2016年8月13日から29日の期間にカリフォルニア州において RUBeC 演習に参加してきた。RUBeC とは「Ryukoku University Berkeley Center」の略であり、アメリカのカリフォルニア州バークレー市にある龍谷大学の北米支部へ学生を派遣するプログラムである。この科目ではそこで、テクニカルライティングと学会発表を想定した英語のプレゼンテーションの学習などを行う。今回は RUBeC 演習の活動内容について報告する。

2. 参加目的

今回、私がこのプログラムに参加した理由は、ふたつある。一つは国際学会に向けての英文の作成、プレゼンテーション能力の向上させるためである。二つ目は、私は海外渡航の経験がなかったため、この機会に海外で生活し文化の違いなどを感じ、視野を広げ、今後の活動に生きてくるのではないかと考えたためである。

3. 授業内容

3.1 テクニカルライティング

事前準備として自分の研究に関する要旨文を作成し授業に臨んだ。最初は、冠詞・前置詞・接続詞など日本人には理解しにくい部分を丁寧に指導していただいた。また、毎回の授業のはじめには簡単な会話をすることが設けられた。日本ではわからない英語の言い回しや発音などを知ることができた。最終的には担当していただいた先生の助言や勉強してきたことを基に自分の要旨文を修正していった。



図1 最終プレゼンテーションの風景

3.2 プレゼンテーション

こちら事前準備として自分の研究に関するスライドを作成して授業に臨んだ。英語のワードストレスやチャンクなどについて学んだ。ワードストレスとは文章中の重要な語句を強調して発音し全体的な内容が理解できるようにするための話し方である。チャンクは文章中の文節を区切って発音し、聴衆が理解を早めることを目的としている。また、アイコンタクトやジェスチャーの重要性などを指導してくれた。最終発表の前に簡単なプレゼンテーションをおこないこれらのことを学んでいった。スライドに関しては Yahoo と Google のホームページを例に、1枚のスライドの情報量を多くせずシンプルなスライドを作るよう指導された。専門用語を並べられても聴衆すべてが理解しているわけではないからである。

4. 企業・協定校視察

8月17日私たちはサンタローザにある Thermal Technology 社を訪問した。この会社の規模は40人と少ない従業員だが、SPS（放電プラズマ焼結）を最初に取り入れるなどしている。SPS法とは機械的な加圧とパルス通電加熱とによって、被加工物の焼結・接合・合成を行う加工法である。エンジニアリングルームで試験用の装置を実際に動かしてもらった。今回見せてもらった装置は3000度まで最高で上昇するとのことだった。1分ごとに摂氏100度上

昇し、そして15分で最高温度に到達するとのことだった。低電圧のため装置自体あまり熱くならず冷たかった。私たちが見学したときは最高温度まではいかなかったが短い時間で温度が上昇していくのを見ることができた。従来のものでは4~5度加熱するだけでも10時間ほどかかり、冷却にも同じく4~5度下げるのに10時間以上かかっていたとおっしゃっていた。温度の上昇などを計るには赤外線センサーを用い、外側から計るとのことだった。

8月24日私たちはカリフォルニア大学デービス校(UC Davis)を訪れた。UC Davisはシリコンバレーに近く、立地条件がかなりよく、最大30平方キロメートルある。サクラメントの近くにもあることから州との連帯ができると考えられる。また、資金がとても多く10億ドルを超え、最先端の技術で研究することができる。また、農学部が非常にさかんでキャンパスを見学したとき農作物に関するものが多々あった。留学生も多く人種系の対応も充実しているとのことだった。施設が日本と比べてかなり充実している印象をもった。24時間開いている図書館など、大学全体が一つの街として機能しているようだった。研究施設として地質モデリングをおこなっているGeotechnical Modeling Facilityを案内してもらった。ここでは遠心分離機を使い地震や津波を想定して研究をおこなっていた。規模が大きい装置から小さい装置様々なものを使い試行錯誤していた。最先端の技術を用いたりするので規模が大きく学部生から自分たちでしっかり考え自分たちの研究を進めているように感じた。

5. 海外での生活

滞在期間の2週間の間は現地のホストファミリーのもとでホームステイ生活を送った。ホストマザー



図2 RUBeC 演習終了後の集合写真

はとても日本が好きで週末は私たちが日本食を作りホームパーティを開いた。また、カーレースにも連れていってもらい日本にはない文化を経験できた。しかし、ホストファミリーは英語しか喋れず、最初のうちは聞き取るのに苦労した。また、分からない単語、言い回しがあると別の言い方や単語の説明などで会話がスムーズに進まないこともあった。さらに、英語で話すときも発音がしっかりしていないと中々理解してもらうことができなかった。けれども、少しずつ相手の言っていることが理解できるようになったと感じた。

6. おわりに

今回のRUBeC演習に参加することで改めて自身の語学力の低さを痛感した。しかし2週間と短い期間であったが語学力向上につながったと思う。そしてこれをきっかけにさらに英語を勉強し、グローバルな展開をしていきたい。最後になりますが、RUBeC演習にあたってお世話になった富崎先生、大津先生、小野先生に、この場をお借りしてお礼申し上げます。